

落語 【風が吹けば桶屋がもうかる】

(脚色 by Shigeo.Takei)\*1

熊「だからさ、どうして風が吹けば桶屋がもうかるんだい？」  
八「まだ聞くのかい。めんどつくせえなあ、風が吹けばもうかるんだよ、桶屋が」  
熊「そんなこと言ったって、わからなえよ。もう一回おせえて(教えて)くれよ」  
八「しょうがねえなあ。これっきりだぜ」  
熊「ああ、いいよー。早くやんねえ、えへへ」  
八「笑ってやがるな!? 張ったおすぞ」  
熊「乱暴いっちゃあいけないよ。まず風が吹くんだろう? 大風(おおかせ)かい?」  
八「ばっかやろう。このとうへんぼくめ。大風が吹いたら屋根屋がもうかるんだい!」  
熊「あれ? そうかい? 夏の大風じゃあねえんだな。いつの風だい?」  
八「いいか、ここんところが大事なんだが、春の風よ」  
熊「へえ、春の風かい。はるうかぜに っと、くらあ」  
八「おめえも調子いいねえ。だけど春の風ってえのは、そんな生易しいもんじゃねえぜ。  
春の風ってえのはな、びゅーっつ! と、つええ(強え)風が吹いてよう、砂混じりのつむ  
じ風みてえのが顔にあたるだろう?」  
熊「うんうん」  
八「目に入ったらひでえもんだ」  
熊「そうだよなあ。おれなんかつい目をこすってよ、目が真っ赤になっちまった」  
八「そうよ。そこよ!」  
熊「え? どこだい?」  
八「何をきよろきよろさがしてるんだい! 何も落っこってやしねえよ。そうじゃなくて、  
目をこするだろう? おめえみてえな不潔な奴が目をこするてえと、流行り病(はやり  
やまい)よ」  
熊「ふうーん、そうかい?」  
八「そうに決まってるじゃねえか、わかんねえのか? このとうへんぼくめ」  
熊「わかったよ、そう、ぼんぼん言うなよ」  
八「かったるいことを言ってるからじゃねえか。いいかい、目に黴菌(ばいきん)が入って、  
あっという間に目がつぶれておめえは盲(めくら)だ」  
熊「そうかい? 盲になっちゃうの? おれが? ... なんだか、急だなあ」  
八「あたぼうよ。おめえなんか、にわか盲だから、満足に歩けやしねえや」  
熊「とほほほ。歩けなかったら、どうやって暮らしをたてたらいいんだい?」  
八「そこよ。そいで、しかたがねえからみんな門(かど)づけだあな」  
熊「えっ? 門づけてえと、あの、編み笠(かぶ)かなんかかぶって、三味線(さんま)かなんか抱えて、一  
軒一軒まわって、おあし(銭)をもらうの?」

八「そうよ、あれよ」  
熊「ええっ？あれはやめとこうよ。色男のやる役じゃないよ」  
八「なに馬鹿なことを言ってるんだ。他にになにか芸があるかってんだ」  
熊「とほほほ、でもおれは三味線はひけないよ」  
八「稽古すればいいじゃねえか。他におまんまを食う道はねんだから」  
熊「ああ、情けない。お前さんは同情ってものがないのかね」  
八「同情してるから三味線を習えって言ってるんだ。それにおめえだけじゃあねえんだから、安心しろい」  
熊「えっ？他にいるのかい？三味線を習う人が？」  
八「あたぼうよ。春の風はつええや。びゅーっとひと吹きすれば、ざっと千人の盲ができらあ」  
熊「ほんとかい？あきれたねえ」  
八「あきれたってしょうがあるめえ。春の風はなんたってつええ(強え)ンだから」  
熊「そりゃあそうだなあ、あん時の風はひどかったからなあ」  
八「そうだろう？目がつぶれるんだよ」  
熊「そうかもしれないね。あんときはね、おれが新みちの角(かど)で目を押さえていると、『にいさん、どうかしましたか？目が痛いなら、ここの井戸でお洗いなさいな』ってきれいなお姐(ねえ)さんが親切にしてくれて、楽になったんだっけ、ウフフ」  
八「ちえっ、思いだしてのろけてやがらあ。そうだろう？そうでなければおめえはもう、今頃目がつぶれてらあ」  
熊「ああ、なんまいダブなんまいダブ」  
八「何を言ってやがる。ところでおめえ、三味線はどうやってつくるか知ってるかい？」  
熊「え？三味線ねえ。あれは確か木の胴になんかの皮を張って作るんだらう？」  
八「そうよ。猫の皮よ」  
熊「へええ、猫ねえ」  
八「猫は猫でも三毛猫がいいんだが、三毛猫を千匹も集めるとなるとえへん(たいへん)だ」  
熊「そりゃそうだろうねえ」  
八「おめえなんか、にわか盲でわかりやしねえんだから、ぶちにしとけ！」  
熊「いえ、おれは一流品ごのみだから、やっぱり三毛にしておくれ」  
八「なにが一流品でえ。おめえなんかぶちでも上等過ぎるくれえだ」  
熊「見えなくたって、こころは~錦」  
八「わかったよ。おめえには三毛の上等なとこを回してやるよ」  
熊「うんうん。これで世のなか大平楽(たいへいらく)」  
八「わかんねえ奴だな。なにが大平楽だ。猫を千匹もとったらどうなる？」  
熊「うん、ねずみが暴れて困るだらうなあ」

八「そうよ．そこよ．おめえんどこにねずみはいねえかい？」

熊「ああ，こないだなんか夜中に出て来て，床の間(とこのま)においといた到来もののお菓子に手をつけようとしたから，桶ん中にしまってふたをしたら，がりがりかじりやがった」

八「そうだろう？ おめえだってちゃんと知ってるじゃねえか．桶がかじられて穴があいちゃったらどうする？」

熊「穴があいちゃったら仕方がねえから，桶屋に頼んで新しいのをこさえてもらうか」

八「そうだろう？ 仕方がねえから桶屋に頼んで新しいのこさえてもらったり，修繕してもらおうだろう？」

熊「うんうん」

八「だから桶屋がもうかるんじゃあねえか」

熊「うんうん」

八「これで終わりよ」

熊「なにが？」

八「なにがって，おめえが聞くから話してやったんじゃねえか」

熊「え？ この話，つづいていたの？」

八「あたぼうよ．だから風が吹くと桶屋がもうかるんだよ．良く覚えとけ！」(終り)

(\*1)これは，子どもの頃に聞いた落語の調子を，自分で復元してみたもの．落語全集などの文献を参照していないから，噺家(はなしか)が演じているのとは違うかもしれない．しかし，前向き推論の学習には役にたつだろう(武井恵雄)